

## おいしい水<sup>みず</sup>

こうこうじだい<sup>こ</sup>ともだち<sup>ち</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>あ</sup>つか<sup>つ</sup>きつさてん<sup>てん</sup>おだきゅうせん<sup>せん</sup>  
高校時代、友達との待ち合わせによく使った喫茶店があった。小田急線

しもきたざわ<sup>ざ</sup>せんろ<sup>ろ</sup>よこ<sup>よ</sup>はい<sup>はい</sup>ところ<sup>と</sup>こ<sup>こ</sup>  
の下北沢の線路わきをちょっと横に入った所なのだが、小ぢんまりとし

きづく<sup>き</sup>みず<sup>み</sup>なまえ<sup>な</sup>みせ<sup>み</sup>  
た木造りの店で、「おいしい水」という名前の店だった。

は<sup>は</sup>だ<sup>だ</sup>まど<sup>ま</sup>よこ<sup>よ</sup>せき<sup>せ</sup>すわ<sup>す</sup>ともだち<sup>と</sup>く<sup>く</sup>ま<sup>ま</sup>  
わたしは張り出し窓の横の席に座って、友達が来るのを待ちながら、わ

ちい<sup>ち</sup>じぶん<sup>じ</sup>うちゅう<sup>う</sup>も<sup>も</sup>  
たしもいつかこんな小さな自分だけの“宇宙”が持てたらいいな、といっ

かんが<sup>か</sup>  
もぼんやり考えていた。

アントニオ・カルロス・ジョビンのボサノバに『おいしい水<sup>みず</sup>』という曲<sup>きょく</sup>

し<sup>し</sup>さい<sup>さい</sup>す<sup>す</sup>  
があると知ったのは、20歳を過ぎてからだ。

は<sup>は</sup>こうこう<sup>こ</sup>い<sup>い</sup>きつさてん<sup>てん</sup>  
恥ずかしながら、それまで高校のときによく行った喫茶店「おいしい

みず<sup>み</sup>みせ<sup>み</sup>なまえ<sup>な</sup>ゆらい<sup>ゆ</sup>まった<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>  
水」の店の名前がボサノバに由来していることなど全く知らなかった。と

じたい<sup>じ</sup>いったいなん<sup>い</sup>  
いうよりも、ボサノバ自体、一体何なのかもわからなかった。

かんが<sup>か</sup>さいのう<sup>さい</sup>さい<sup>さい</sup>ひ<sup>ひ</sup>  
どう考えたって才能ありそうもないのに、20歳になったある日、そのこ

こ<sup>こ</sup>じぶん<sup>じ</sup>うた<sup>う</sup>おも<sup>お</sup>いっしん<sup>い</sup>  
ろのめり込んでいたシャンソンを自分でも歌ってみたいと思う一心で、あ

せんせい<sup>せ</sup>ところ<sup>と</sup>かよ<sup>か</sup>はじ<sup>は</sup>せんせい<sup>せ</sup>こえ<sup>こ</sup>き<sup>き</sup>  
る先生の所へ通い始めた。先生はわたしの声を聞くなり、「アストラッ

き<sup>き</sup>い<sup>い</sup>  
ド・ジルベルトを聴いてごらん」と言った。

ものがたり 物語のタイトルをつけるのが苦手なわたしが、今回ばかりは小説の

なかみ か あ さき き  
中身を書き上げるよりも先にタイトルが決まっていた。

かんとうてき うたごえ き さい い もど  
ジルベルトのかれた官能的な歌声を聴くと、20歳のころ、行きつ戻り

つ、もんもんとすごしていた日々がわたしの中で、妙に重なり合ってよみがえってくる。

しょうせつ みず き じぶん いしき  
小説『おいしい水』は、タイトルが決まったときから、自分で意識して

なみま ただよ いま ひび  
はいなかったことだけれども、波間を漂うような今までの日々とのひとま

けっちやく めざ おも  
ずの決着、を目指していたのではないかと思う。

しいなさくらこ しろ ふく  
椎名桜子『それでもわたしは白い服がほしい』マガジンハウスより